

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2471200309		
法人名	有限会社 希ぼうの里		
事業所名	グループホーム ホコホコ		
所在地	三重県伊賀市依那具1004		
自己評価作成日	令和6年2月27日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_02_kani=true&JigyosyoCd=2471200309-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和6年3月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ホコホコの特徴は、生活の広がりや心がけ一人ひとりの想いに添った外出や地域住民としての暮らしを支えていることです。居間と食堂の前面は庭に続く開放的なテラスで、お茶を飲んだり散歩をしたりと緑の景色と風を感じながらの暮らしが広がります。また病院への受診や通院は24時間体制で職員が付き添い対応しています。私たちの信条は「いつのときも心に寄り添うホコホコの暮らし」です。老いは誰にでも訪れ、それは人生にとってかけがえのない実りのときです。在宅介護では支えることが難しくご自分の家に住みづらくなったとき「自宅に変わる家」として移り住んでいただき、日常のごく普通の暮らしを大切に人生終焉のその時まで誇りを持って暮らしていただくことです。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

2003年開設より21年目を迎える事業所で、伊賀市の自治会「依那具4番組」である。事業所前には伊賀鉄道の猪田道駅があり、電車の走る風景がリビングから見える立地である。「依那具の環境を守る会」のコスモス植育活動により、猪田道駅前面に毎年コスモス畑が整備され、コスモスの開花時期が訪れると、利用者も毎日良い眺めを楽しめて自宅の庭の様である。又コスモス畑の写真を撮ったり見学者も訪れる名所となっている。運営にあたっては管理者、介護支援専門員、介護リーダー相互の話し合いがよくなされており、職員とも合意に基づく取り組みが随所に見られている。利用者は持病や身体機能低下等を抱えていても、職員はその人の能力に応じて悪化し無い様に支援を続けて行く中で「ありがとう」と言われた時の嬉しい気持ちがやり甲斐に繋がっている、と話す職員の言葉が印象的であった。「ホコホコ」が一軒の家として、開設時より地域との馴染みの関係継続があり、利用者視点の支援に取り組んでいる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「いつのときもその人の心に寄り添う支援」が理念の柱である。毎年標語を作って理念が実現できるよう心がけ、ここは、自分の家の離れのように思ってもらえる暮らしづくりを目指している。	事業所理念のフレームが居室前空間にインテリアとして飾られ、理念を基軸として毎年標語を作っている。今年度の標語は「みんなの気持ちつながろう心」とし、利用者職員が笑顔で寄り添う「ホコホコ」の心温かく気持ち良い暮らしに繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスが第5類に移行したことに伴い、市民センターでのイベントや文化祭等にも徐々に参加させてもらっている。また、地域の畑で咲いたコスモスの花をホームに移植させて貰ったりしている。	依那具地域の自治会に4番組として加入し交流がある。近隣より日常的に新鮮な季節の野菜が届き、暮らしの中に事業所との相互の繋がりが築かれ関係性も良好である。地域の行事や市民センターのイベント等の声掛けにも、参加が始まっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	南中学校の職場体験の実習の場として提供し、本年度は南中学校の2名の生徒からの応募があり職場体験実習に参加して頂いた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームの状況や活動内容を報告している。コロナ禍では書面での報告を行っていたが、R5年3月開催よりホームで自己評価の実践状況を説明し意見交流を行っている。	対面での推進会議が軌道にのり、参加者から興味を示された発言や提案が、活発に交わされている。市職員への会議開催の知らせは事業所より直接出向いて、熱心に参加を呼び掛けている。参加メンバーは定着しているが、家族の参加率向上にも努めている。次回の会議開催は4月26日で調整している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	伊賀市介護相談員の訪問派遣が休止中である。管理者は、伊賀市社協や介護支援事業所、ケアプランセンターなどを定期的に訪問し、ホームの状況報告や意見交換を行い連携に努めている。	事業所の困り事や課題解決には情報や助言を受けている。介護保険更新手続きや提出書類などは事業所の運営者が窓口へ出向き、担当者を訪ねる機会を持つよう取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月のミーティングで「身体拘束等の適正化検討委員会」を開催し、身体拘束関連の事例や資料を用いて勉強している。その上で支援内容を見直し、身体拘束に繋がるような対応がないか点検している。	「身体拘束等の適正化検討委員会」に関する委員会と勉強会を毎月開催し、クイズ形式でテストの答合わせをしながら、身体拘束をしないケアの理解を深めている。新人職員には「身体拘束をしないケア」の基本的事項から丁寧に説明し、実践に繋げている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「高齢者虐待防止委員会」を設置し、毎月のミーティングで勉強し協議している。職員は、言葉かけ、態度、雰囲気気を付けて虐待防止に繋がるような対応が無い、互いに連携し点検している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営者は、地域福祉権利擁護研修を受講した。これまでは成年後見制度を2名、伊賀市社協の権利擁護を2名が利用し、協力してきました。現在は、1名の生活保護受給者を支えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約内容は重要事項説明書に基づき説明している。特に重度化した場合におけるホームの方針や入院時の対応、利用料金の内訳などを丁寧に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の訪問時は、利用者の日頃の様子をお伝えし、意見交換をするようにしている。病院受診時や面会の少ない家族には、担当職員が毎月電話で報告し、要望等をお聞きしている。	常日頃から日々の生活での些細な事も面会時には家族に伝え、対話が増える様に心掛けている。担当者が毎月電話連絡している家族もあり、又家族の声は充分聴き取って申し送りノートで共有し、運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、毎月の職員ミーティングに参加して意見交換を行っている。ミーティングでの協議内容や業務の改善点を実務にスムーズに反映できるよう取り組んでいる。	勤続年数の長い職員が多く、気楽に話し合いが持たれ、推進会議へ職員参加も継続して意欲向上の維持に繋げている。職員の欠員や緊急時は管理者がシフトに入り勤務調整可能で、職員からは安心の声がある。勤務シフト作成には、職員相互の意見が反映される様に取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	運営者は職員の勤務状況や健康状態、要望を把握するよう心がけている。就業規則は都度見直しを行い改善している。また資格取得への支援、勤務時間の調整等、職場環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員に応じた研修や資格取得のための奨励金制度を設けて支援している。現在、就業中の介護職員のうち、介護支援専門員3名、介護福祉士3名がこの制度を利用して取得している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	全国認知症グループホーム協会の会員として情報を得ながらサービスの向上に努めている。管理者は伊賀市社協や居宅介護支援事業所、他事業所を定期的に訪問し、連携と情報交換に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	計画作成者と担当職員が本人の心身の状態、家族の意見、要望等を踏まえ、支援内容を検討している。そして介護職員ミーティングで話し合い、その後の様子や変化に対応できるよう適切に取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の調査で本人の状態や問題点、生活習慣、病歴等をお聞きする。また、家族が抱えている不安や心配事なども聞かせてもらい、支援内容を検討している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ホームの特徴を説明した上で最善の支援方法を検討している。本人の状態に応じて他の施設やサービスを提案(紹介)させていただくこともある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	残存機能を維持できるよう自然体で見守り、無理のない暮らしをサポートしている。互いに信頼できる関係づくりを心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族とは定期的(毎月)に日頃の様子をお伝えし、支援内容を共有しながら支えている。家族の絆を大切に、面会はホーム内の玄関やテラスで行い場所や環境を工夫して続けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族との面会は、項目19の通り続けている。季節を五感で感じて貰えるよう庭やテラスで日光浴をしたり、地域が育てたコスモスを摘んだりして散策している。	毎年事業所の駅前に咲くコスモス畑は、馴染みの散歩コースである。隣人が花の水遣り中に利用者と立ち話の談笑も、馴染みのひと時である。コロナ禍でも窓越し面会など工夫をしながら、関係性が途切れ無いよう支援を継続している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士支え合う場面も増えてきたが、混乱や孤立することもあるので気を付けている。利用者さんの気性や相性に配慮して席の配置を工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や退去をされたときは、現状を記入したフェースシート(介護サマリー)で支援内容や生活状況の情報提供を行い、必要に応じて相談や支援を続けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや職員が気づいたことを日々の記録や看介護記録に記入し、その内容は申し送りノートとスタッフ間での引継ぎで共有している。その人らしい暮らしが継続してできるようサポートしている。	利用者の好きな話題を家族から聴き取り、不穏時に繋げる対策を職員間で共有している。帰宅願望や不穏状態では先ず丁寧な傾聴を心掛け、本人の思いを汲み取り、体調変化の気付きや工夫の支援をしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居に至る経過や生活歴、病歴等をお聞きし、調査表に記録する。入所後はフェースシートを作成し、状態に変化が生じたときは適宜、見直している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録には暮らしの様子を記入している。その日の様子や心身の状態を次のスタッフに共有できるように引き継いでいる。また毎月のスタッフミーティングで現状や変化の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員が担当分けして利用者の状態を把握している。その内容と利用者の想いを反映できるように計画作成者と協議し、介護計画を作成している。家族には都度報告し、体調面や様子に変化があれば見直している。	主担当者が最初のプラン作成とモニタリングを行い、介護支援専門員が総合纏めと家族への確認をしている。4ヶ月に1度見直しを行い、全職員がプランの内容を把握し易い様に、改善された書式の計画書を作成し工夫している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	看介護記録はバイタルチェック、食事摂取量、排泄の状況を記録し、介護支援日々の記録は、その日の様子を記入している。そのほか申し送りノートを参考に、介護計画の見直しやフェースシートの追記をしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	病院への受診や通院は全てホームが対応している。家族とは連絡を密に必要なに応じて病院へ駆けつけてもらっている。また、介護認定などの代行サービスも行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	新型コロナウイルスが第5類に移行したことに伴い、地区のイベント、文化祭等、徐々に参加している。職員によるホームでのレクレーションや整髪など、暮らし作りのサポートは継続している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームの協力提携病院はあるが、本人や家族の希望する医療機関の受診も可能である。受診はホームが対応し、家族とは連絡を密に受診内容を報告し要望をお聞きしている。(お礼の言葉がほとんどである。)	2ヶ所の協力病院へ、月に1度の外来受診に管理者が付き添ってサポートしている。夜間緊急時は隣家の事業所の運営者に内線連絡の上で、必要なバックアップの支援体制を整えている。家族には其の都度受診内容を連絡し、丁寧に説明することにより安心と信頼に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	准看護師を職員(非常勤)として配置し、健康管理の強化を図っている。介護職員は毎日のバイタルチェック(血圧、脈拍、体温)や食事摂取量、排泄状況等を確認し、本人の様子や体調変化の早期発見に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先の担当医、看護師に現状を記入したフェースシートで説明している。病状や見通については家族と一緒に聞かせてもらい帰園に備える。また、身の回り品や洗濯物等必要に応じて対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者や家族の意向、医師の指導に基づき可能な限り終身対応を行っている。終末期に予想される課題や医療支援について三者(主治医、家族、ホーム)で話し合い、協働体制を確認している。この方針は重要事項説明書に記載し都度理解を深めている。	入居時に重度化や終末期に向けた利用者の尊厳を持った取り組み方針を伝え、利用者と家族の看取り希望に添った支援を行っている。職員のターミナルケアへの周知や理解を得ており、事業所として臨時期に負担が軽減出来るよう最善の支援体制を図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生時や救急時に備えて緊急時対応マニュアルを整備している。その内容は全員ミーティングで確認している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	新型コロナウイルスが第5類に移行したことに伴い、消防署員の方に来て頂いた。消火器の使用の確認、避難経路の確認、一般的な水害のお話、避難訓練等を実施した。	消防署立ち会いを含め年2回防災避難訓練を実施している。BCP作成やマニュアル整備にも取り組みが進んでいる。屋外には1tの貯水タンクが設置され、備蓄関連にも追加や見直しが見られ、自主防衛には力を入れている。	消防署の情報を得ながら、自然災害発生時「警戒レベル発令」の厳しい直面を想定し、危機感を持って実際に避難実施の取り組みを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	尊厳の保持と「心に寄り添う支援」を大切に、その人に合った言葉かけや対応ができるようミーティングなどで話し合い、職員間で気を付けながらサポートしている。	一人ひとりの特徴や個性に合わせて、どんな場面でも人格を尊重した声掛けが重要だと考えて接している。すくみ足の症状があるパーキンソン病の利用者に対して気配りをしながら、さり気ない周りへの配慮を忘れずに適切な声掛け誘導をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は、その人の関心ごとや好みを把握し、日々の暮らしに活かせるよう働きかけている。そして可能な限り自己決定をしてもらっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の状態に合わせて生活できるよう支援している。日課を設けず思い思いに過ごせるよう個別対応に努めている。屋外での散歩や日光浴をなるべく取り入れるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装は着慣れたものやその人らしいおしゃれができるよう支援している。毛染めやカット、爪切り等の身の回りの職員が行うようにしている。希望があれば、美容院にも付き添いさせて頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	四季に応じた食事を提供できるよう心掛けている。お手伝いが可能な方には調理の準備や配膳、食器拭きをしてもらっている。食事前の口腔体操(パタカラ)と忍にん体操を毎日行っている。	野菜の皮剥きや味見など利用者の大切な役割を活かしながら、職員と一緒に準備している。調理中の匂いや音を感じながら、気持ちがかもった手作りの食事支援をしている。食前にはパタカラ体操と忍々体操を楽しく行っている。人気のひとり用鍋料理は豊富なメニューが揃い、食卓を飾って好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の食事摂取量を看介護記録に記録し、栄養管理に努めている。水分は十分に摂取して貰えるよう日中は定期的にお茶やスポーツドリンクを配り夕食後にはミルクを促して排便や水分摂取を支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の声かけと見守りで口腔ケアをサポートしている。入れ歯の方には就寝前に、はずしてもらい、義歯洗浄剤を使用して清潔保持を確保している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	毎日の排泄状況を記録し、排泄パターンを把握してサポートしている。便通の良いもの(牛乳やヨーグルト)を毎日摂取し、便秘の方には、かかりつけ医と相談して、心地よい身体維持に努めている。	退院後におむつ使用で入居された利用者が、職員の熱心な思いと支援により紙パンツでトイレでの排泄まで機能回復が出来、職員はやり甲斐を感じている。毎朝のヨーグルト摂取は排便習慣にも繋がっている。急がせず慌てさせずに個々の自然な排泄支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維を多く含んだ料理や乳製品の摂取を心がけ、就寝前にはホットミルクを、日中も定期的に水分補給を促している。誤嚥予防の「パタカラ運動」、お腹のマッサージ、足踏みなどを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	安全に気持ちよく入浴できるよう2人の職員がサポートし、週2~3回は入浴して貰っている。更衣から入浴までのプライバシーへの配慮と入浴前後の水分補給に気を付けている。	勤務シフトにより職員3人体制の中、午後からの入浴である。入浴を拒む場面では入浴剤や温泉の楽しい話題の声掛けの工夫により「いい湯だな～」と歌い乍ら気分良く入浴出来ている。利用者の不安や負担感、心情を理解した配慮を大切に支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活パターンを尊重し、昼間はなるべく活動してもらい生活リズムを整えて夜はゆっくり休めるようサポートしている。不眠の方は主治医指導の下、安眠を支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の用途に応じて職員が仕分けし、服用は二重チェックで管理している。病状に変化があるときは、早めに主治医に報告して指示を受けるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者さんの生活歴や想いに沿って興味を持っていただけるもの(音楽や塗り絵など)を提供し、屋外での散歩や日光浴も取り入れて、一日を楽しく過ごしてもらえようサポートしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナウイルスが第5類に移行したことに伴い、地区のイベント、文化祭等、徐々に参加している。ホーム周りやドライブなどで四季の移り変わりや自然にも触れ合っ貰っている。	昨年11月依那具地域の公民館で地域のイベントに参加出来、手品や劇等の外出と触れ合いを楽しんで貰えた。家族の迎いで遠方へ親族の葬儀の外出では、事情で職員が迎えに行く事となったが、利用者はその事を覚えていて今でも話題にも出ている。きめ細やかで協力的な支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族と相談して、お小遣いは個人別の出納帳でホームが管理している。使用時についても安全のため、職員が管理してサポートしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の要望に応じて手紙を書いたり電話をしたり、その都度サポートしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建物は民家改修型で落ち着きがある。居間は日当たりが良く、前面が広いテラスでお茶や食事も楽しめる。庭には花壇や小さな畑も有り、田園風景に電車が走っている。室内は馴染みの家具や装飾で居心地良くしている。	屋内外を緩やかに繋ぐデッキテラスは利用者同士豊かな関係性が繋がる空間であり、様々な目的に利用され開放的な場所である。広く明るいリビングは、毎日家族として過ごす快適な生活スタイルの時間を共有できる唯一の空間で、どの席に座っても田園風景や電車の走る光景が広がり、利用者は落ち着いて過ごせる様子が伺える。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間の他にホールにソファを置いて2~3人がくつろげる場所を設けている。テラスや庭には、ベンチやテーブルを置いてゆったり過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	部屋の入り口は写真入りの表札と暖簾をかけている。室内は使い慣れた物や思い出のある物など持ち込みは自由である。利用者の状態に応じて安全面への配慮や配置の工夫をサポートしている。	居室入り口には暖簾と、写真入表札があり、部屋の間違いや混乱がない様に配慮されている。廊下の天井は高くガラスの天窓で、居室前が明るく安全な造りである。チェストや棚が整備され、大きな持込み品は無いが、好みの小物類や写真が大切に飾られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者毎に、お部屋内の配置を工夫して転倒防止に努めている。ホーム内は、歩行の妨げになる物に注意し、場所や物事が分かりやすいよう、貼り紙や声かけに工夫している。		